

第 1 部

30年の歩みを振り返って



丸山晩霞が居住した羽衣荘

あなたも参加を —会費50円で文化協会発足—

広報担当者

町のみなさんが農作業や仕事の間につくったり、書いたりしたものを発表する町作品展が、16日から19日まで町民センターで開かれました。この作品展は町公民館が開いたもので、絵画・人形・手芸など約700点が出品されました。この作品展はことで9回目ですが、年々出品も多く力作がめだちました。作品は生活からにじみ出たもの、生活の中に美を追求したものに人気が集っていました。(中略)

町にある文化グループを一つにまとめて自主的な文化活動をとおして豊かな人間性を養なって、生きがいのある生活をしていくこうと、町文化協会が発足しました。

発会式は11月14日、町民センターでおこなわれました。

のことについては係に聞いてみました。

問い合わせ「この会へはどんな人がはいれるのですか」

答え「町に住んでいるか町内に勤務している人で、文化活動に興味のある人ならだれでも入会できます」

問い合わせ「文化活動といつてもいろいろあると思いますが」

答え「いろいろな文化活動がありますので、美術部会、芸能部会、技芸部会、文化部会、歴史部会、その他の部会と六つの部会に分けました」

問い合わせ「六つの部会に分けたとのことです、具体的におしえてください」

答え「美術部会は絵画、書道、工芸、彫刻。芸能部会はコーラス、舞踊、民謡、朗吟、うたい。技芸部会は人形造り、手芸、生花、生活改善、茶の湯。文化部会は短歌、俳句、川柳、読書。歴史部会は古文書研究、文化財保護、郷土史研究。その他の

部会は今までの五つの部会にいれるとのできないもので、青年団としました」

問い合わせ「この会はどんなことをするのですか」

答え「文化創造のための講習会、実演会、指導会、研修会、学習会、講演会等の開催、自分達のつくった作品の展示発表会、各種芸能種目の発表会、文化情報の交換および提供などをしていきたい考えです」

問い合わせ「いくつもの部会にはいってもいいですか」

答え「いくつもの部会にはいってもらってよいです」

問い合わせ「会費はどのくらいですか」

答え「一人50円です」

問い合わせ「この会にはいりたい時は」

答え「公民館事務局（有線20713）であっせんしますのでこちらへお聞きください」

問い合わせ「役員の方を紹介してくれませんか」

答え 会長 寺島長虎さん（桜井）

副会長 荒井 信さん（新屋）

常任理事

美術部会 寺島長虎さん、柳沢喜代太さん

芸能部会 馬場音一さん、田中栄次さん

技芸部会 寺島郁代さん、関恒代さん

荻原とめよさん

文芸部会 荻原 勝さん

歴史部会 柳橋 透さん

その他の部会 若林則夫さん

監事 横関幸子さん、中村軍司さん

(昭和48年「広報とうぶまち第141号」より)



▲文化協会発足当時の様子

この様なこともあった

東部町美術会会長 寺島 長虎

昭和48年の秋季かと思います。役場へ集るようにという通知に接したので行って見ると、文化に関係のある人、或はそのことに実績をのこして来ている方々が集って居りました。役場の係は小山博正さんだったと記憶しています。文化の方面の話やその組織などについて詳しくお話をありました。二年前に県に文化課が設けられ信州美術会の大きな仕事の県展がその文化課の中に含まれることになったことを知ったので、何らかの関連があるのではないかろうかと思わせられました。

この当時東部町内の各区の模様を見ますと、絵画、農民美術の木彫、又生け花、詩吟をはじめ歌謡曲や民謡等々三十余の区でそれぞれ行われて居り、まだ初めの段階のものもあり相当熱心に行われている区や地区もあり、絵画などは東部町美術会として二十年を超えて毎年展覧会などをやり、平生苦心の作の発表もしています。

絵の場合「そんなものなくてもよいではないか」という意見もありました。絵画の場合一万円位の助成を町から頂いた事も在りました。

こうした文化協会のお話により町から申しかけられたけれども、その下地をなすものの受け入れ態勢は大なり小なりにあったと十分考えられました。

かくして文化協会が結成されて役員の件に及び会長、副会長男女一名皆で三名が定められた。不肖私が会長に選ばれたことは全く意外のことでした。それで先ずこの活動を成長させる町内実情を考える時「先ず第一に金である」と気付きました。私は以前神科小学校に奉職、学校の施設その他の件で村長と接触話合うことは度々でした。

百瀬さんとも（当時村長ではなかった）そのような機会があり百瀬さんは数字に明るく

こういう方面に力量の高い方だと知りました。この文化協会の問題も資金に困って居るものも相当ある故、先ず最初の二・三年は若干の助成金の交付をしてもらうことは絶対に必要だと考えました。百瀬町長の御意見は「そういう趣味に類する事柄を行うにはその負担は各自が分担すべきものである」ということでした。私は先ずこの仕事のスタートゆえ、若干の援助を二・三年与えてこれを盛んにすることはやはり文化の鼓舞に価することだという訳で文化協会から出した予算即五十万円は蹴散らされてしまった。他の関係もからんだといわれたが、結果から言って胸中の怒りをどうすることも出来ず、又会員にも会わせる顔もなく遂に正副会長三名の辞表を提出しました。

後任に小林進氏が選ばれ着実に任務を果されました。現在150グループ、会員1820名に達しています。かくして15年を過ぎ、昨年丸山光夫氏が会長となり澁刺たる息吹きが地底から鳴りひびいて来るような気がします。

私はこの会の自分をふり返り「忍」の一字の大切を思っております。

（平成2年「せせらぎ第7号」より）



文化協会発足の頃

岩下 止代

この度は文化協会発足30周年おめでとうございます。思い出の多くは既に忘却の彼方へ消えてしましましたが、なかには昨日のことのように鮮明に脳裏に浮かんでくるものもあり、一口に30年と申しましても文化協会にとりましては非常に尊い年月のように思われます。

昭和46、7年頃の東部町では、各地区のあちらこちらで書道・茶道・華道・油絵・舞踊・人形・手芸・短歌等多様なグループが主に指導者や個人の自宅を使って心安く楽しく活動しておりました。そして文化協会が発足してからは、同種のグループは部門（又は部会）となり、一部会に複数のグループがあり、その「長」が部会代表として文化協会役員（後に「理事」となりました。理事は各部会に所属するグループの名称・人数・会員名を把握して報告し、併せて人数分の年会費（初めは年会費50円だったと思います）を集めて

八十二銀行より協会宛に振り込んでいました。また、理事会が年2、3回開かれ、学習発表会＝総合作品展等についての検討、話し合いが行われました。

私が所属する人形グループ「白菊会」は、昭和30年代半ば、人形作家として活躍されていた祢津の高橋節先生を指導者にお願いして10人程の仲間で始まりました。当時は元気盛んだった方々も今は私はじめみな高齢となり、あと何年続けられるのか、この会の存続が気がかりです。日本人形はボディ型に従って着せる物（着物・帯・袴等）を全部手縫いで作ります。私どもは若い時から和裁を手がけ着物の基本が分かっておりましたが、今の若い方々にはそこが難儀のようでなかなか加入して頂けません。なんとか勉強して頂いてこの会が継続していくことを願っております。

最後に各グループの皆さまのご努力で文化協会がますます盛んになり、発展されることを祈っております。

創造の歩みを祝って

一晩霞の羽衣かしわにふれて—

長岡 克衛

東部町文化協会が、創立30周年をむかえられた。お芽でたく、すばらしい事です。

人の成長にたとえれば、30年はまさに「立志」の期にあたります。文化の町東部に文化創造の花が咲き、実が結んだ事は町民みんなの喜びです。

21世紀は地方の時代ということで幕があきました。それは即ち、生涯学習社会の到来でもあり、1人1人が光り輝くことでした。

勉強する場は、学校の教室だけに限られていました此れ迄の教育の枠は取り去られ、誰でもが、どこでも、いつでも好きな学習ができるようになりました。その結果男女を問わず、年齢にかかわりなく、めいめいの希望に応じて学習ができます。

文化協会は創立以来、そのような人達の学

習について、計画樹立から相談助言を親切に続けてきました。今、それらの成果は、実に顕著であります。

さて、郷土出身の画家丸山晩霞は、水彩画による美術教育の日本での創始者です。晩霞が祢津に建てたアトリエには、羽衣かしわの木が植えてあり、羽衣荘の名のおこりです。かしわの木は春先に、後継ぎの芽が出てから葉が落ちるといいます。

それ故、屋敷には、かしわの木を一本植えるものだと昔から言われてきました。羽衣かしわの葉の形は、天女の羽衣に似ています。その羽衣は天女の衣です。

宇宙、天上にある美、それを地上の人へ伝えるのは、天女の羽衣であるとの考えです。東部町文化会館のロビーには、晩霞の高山植物群落の陶版画が掲げられています。これは、美・文化を創造する源泉にし、それを継承したいとの願いからです。

音楽と私

土屋征志郎

私は農家の次男として滋野に生まれた。親爺は都々逸を唸っていたし、楽器らしい物といえば唯一ハーモニカと縦笛ぐらいだったが、歌が好きでよく流行歌を歌っていた。そして青年団主催の敬老会を観るのが何より楽しみだった。

高校時代は音楽学校にでも行こうかとクラブ活動は音楽班に入った。これがきっかけで合唱を始め、ふと顧みれば早47年余り続けてきたことになる。高校卒業後、同級生の多くは東京へ巣立っていったが、私は農家の跡継ぎということで音楽学校進学などとんでもない家に引き留められてしまった。家に残る条件としてトランペットを買ってもらった。この楽器を選んだ理由は比較的安価だったからだが、値段の割には音が大きく、夜自室で吹くと近所迷惑になるので仕方なく頭から布団をかぶって練習した。その後、国道18号線

の開通と共に中古のバイクを買ってもらい、お陰で行動範囲が格段に広くなり、小諸の合唱団に通い始めた。更に23才の頃、上田で創作オペラグループを立ち上げるので手伝ってほしいと声が掛かり、5年間5公演に歌い手として参加した。

昭和55年、町に中央公民館が完成したのを機会に全町規模の合唱団を作ろうと東部町混声合唱団の創設に関わり、今年で22年を迎えた。この時初めて文化協会の存在を知った。

平成3年、待望の文化会館がオープンし、この開館を祝ってカンタータ「土の歌」を合唱し、更に平成8年、東部町発足40周年記念事業としてベートーヴェンの「第九」を310名で力強く合唱し好評を博した。

これまで夢中で数々の事業に取り組んできたが、何より先ず自分自身が音楽が好きであること、そして大勢の仲間の協力があったからこそできたと思う。そして、県下何処へ行っても声を掛けてくれる歌の仲間が大勢できたことが、私にとって最高の財産であり、宝物であると思う。

座談会 協会発足10周年記念 東部町の文化を語る 広報担当者

1月12日、「東部町の文化を語る」座談会が中央公民館で開かれました。

これは、町文化協会が（小林進会長、加盟82団体、会員1700人）が発足10周年を記念して発行する会員名簿の作成にあたり、その巻頭を座談会で飾ろうと開かれたもので、同協会関係者のほか、町長、教育長、公民館長など約20人が出席しました。

町文化協会が、こうした座談会を開くのは協会発足以来初めてのこと、「文化協会の今昔」、「町の文化の特質」、「文化と町民性」等いくつかのテーマに沿って、活発に意見交換が行われました。

この日出された主なものを紹介します。
◎体を鍛える、体力づくりという面では体育

協会があり、心と文化の教養を高めるという面では文化協会がある。どちらも長い年月の地道な活動によって大きく育っていくものであり、町民サイドから町政を支える活動をしている。

◎私達の文化活動というものは趣味でやっているものである。中央公民館という大変立派な活動の場を作ってもらっているのだから、行政改革の折、町の助成金はもうもらわなくてもいいのではないか。

◎自分達の趣味でやっていることなのであるから、何もかも町に頼るのではなく自分達で運営するのが本筋であるが、一般の人々の文化の底辺拡大のためにも、ぜひとも町の助成金は必要である。

◎町の文化は長野県内でも非常に早くから開けたところで古く、豊かである。私たちは誇りを持って町の文化を発展させていかなければならない。

- ◎古代の町の文化がどんなに素晴らしい豊かなものであっても、今の私たちには何の関係もなく、それほど大したことではない。それを理解しようとすることが大切である。
- ◎町の遺跡から発掘される土器などを通じて、古代の人たちの生活を知ることができる。それを通して今の私たちの生き方に何かのプラスにすることが大切である。
- ◎町の文化をより一層高めるには、町外の文化との交流が必要ではないか。現状に満足せず中央などのより高い文化と交流し、それを吸収することが町の文化を高める。また、そうした高い文化に向かって努力するという姿勢こそ大切である。
- ◎町から出土した遺品をよそへ貸してあると聞くが、町文化発展のためにも、ぜひともこうした遺品を返してもらう必要がある。そのためには、発掘遺品を展示できる博物館を町に建ててもらわなければならない。
- ◎町民一人ひとりが文化的になることが、町の文化を発掘させる。文化的とはマナーやセンスが良いことである。



発刊に寄せて

東部町文化協会長 小林 進

穏りの秋を迎えスポーツの季節と共に読書に絵画に音楽をはじめ、それぞれ、皆さま方は多忙の毎日をお過ごしのこととご推察申し上げます。

昨年、文化協会発足十周年を記念して、会員名簿を発刊致しました。その節には町の各位より心あたたまる祝辞、そして励ましのことばをいただきましたことは既に巻頭に掲載され、十年を節にしてより一層各分野共に意欲的な学習活動が展開され、今日に至った事を心より会員の皆さんに感謝を申し上げる次第であります。

さてこの度、役員会の全総意によりまして、「文化協会だより」を発刊するはこびとなりました。

◎文化協会のどのグループにも若い人が非常に少ない。文化協会さらに町の文化発展のために、もっと若者が参加できるような方法を考えなければならない。

町長「これからは心の充足が要求される文化の時代である。行政においても文化が強く要請されているところであり、教養(学問)、芸術、スポーツ、レクリエーションを軸に文化行政を推進していきたいと思っている。

読売新聞が“あなたの町の将来のキヤッチフレーズは?”と県下の市町村長にアンケートをとり、その回答が1月1日付の新聞に載っているが、東部町は、“文化と芸術”と答えた。これからも町文化発展のために一層活躍して戴きたい。」

(昭和58年「広報とうぶまち第251号」より)



もとより私たちは、自主的・創造的な文化活動をとおして、今一番求められている大事な、「豊かな人間性」を養い高め、高齢化社会の進む中でお互いに、心のふれあいを通して会員相互の研修を深め、生きがいのある毎日の生活であるべく、文化協会出発の目的に向かってみんなで力を併せて、切磋琢磨、努力をつづけたいものであります。

文化協会だより発刊に当たりまして予算と紙面の都合上一部会員のみのように思われますが順次紙面を通して、「ふれあい」の場所にして皆さま方の計画や、お考えをお聞きする予定ですので、皆さま方のご了承をお願い申し上げます。

今後共皆さま方のご協力を重ねてお願い申し上げると共に、新しい会員の皆さまのご入会を一層願うものであります。

(昭和59年「文化協会だより第1号」より)

文化協会に憶う

竹内 貞良

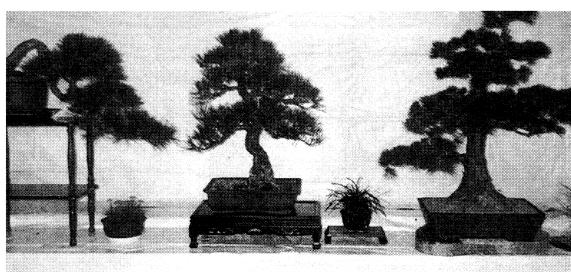
協会だよりの発刊は、文化協会の活動内容を町民の皆様に、御理解をいただくということが主眼であります。文化協会加盟のグループが115余、参加人員1700名という方々が、文化協会発足以来十五年、文化活動に精進されてきました。せっかくの学習もいずれかの方法で町民の皆様の眼に、耳に入れていただく為の行事もしてまいりました。

グループの代表の方々から原稿をいただき、各々がもつ持ち味を大事に、益々このことを通じて文化の向上発展を願っております。

今回の総合文化展を実施致しましても、参加者の譲り合う気持ちと工夫によって、陳列も出来ましたが、光の問題は解決の手段もな

く残念なこともありました。今日まで中央公民館が主体で取り組んでまいりました。社会教育を担当する場所としても狭隘を感じます。時の推移と共に文化会館的な建物の要求度が高まっていることを町理事者、議会関係者の御理解をいただき、早急に実現できることを願ってやみません。今後一層会員一人一人の活躍と、文化協会の増々発展を願っております。

(昭和61年「文化協会だより第3号」より)



“山びこ”は50年に想いを馳せて 白石みさよ

紫の蝶の羽のように咲く花菖蒲が梅雨の中で短い命を精一杯謳歌しています。

昭和27年にレコードコンサートで始まった集いがコーラスに発展しました。戦後間もなく楽しみが何も無い時、歌声は若い人々の心を燃やし波紋が広がりました。音楽室は入り切れず、廊下まで溢れました。当時歌声は日本中に広がり、ロシア民謡の“カチューシャ”や“ともしび”等の曲が流れました。

全国の青年祭で、二位を頂き、NHK青年の主張に出演した頃、まだ新宿の街角は車が僅かに流れ、街路樹があちこちにあるだけの光景でした。農村に歌声が有るのは珍らしいということで“おめでとう信州”…SBC等にも出演しました。何と言っても大きな思い出は、NHKの全国放送30分番組として“信濃路早春賦”に出演したことです。

この華麗な青春時代を過ぎ、青年は外へ外

へと出て行き、女性は結婚して行きました。その中でじっと家を守り、村を守り、町を守り、大自然を守り、苦難の日も耐え抜いた人々が“山びこ”をも守り育てて下さいました。すべてに耐えた時代と言えましょう。

やがて、母となった女性の人々により“山びこ”的姉妹として“コール・エコー”が生まれ“山びこ”と共に歌い合い今を迎えました。

指揮者の私は皆さんと共にこの町に骨を埋める縁で結ばれていますが、私にとっても苦難の時がありました。朝6時に家を出て午後11時に帰宅という生活の中で「コーラスをやめたい」と夫に言いました。夫は「音楽をやっていた人だから結婚したのにやめるなら結婚した価値がない」と言われてはつとしました。

毎週、金、土、は美しい歌声が流れ、あらゆる苦悩も忘れ去られ、そこに深いしあわせが訪れます。50年！合唱は不滅です。

思い出される町民センターの不寝番

前文化協会長 小林 進

初代寺島長虎先生を会長に発足した協会の活動の場は「町民センター」と呼んでいた旧庁舎あとであります。部屋数もたくさんあり広いので、何か催物をしても非常に便利であると、町内外の皆さんから喜ばれたものでした。しかし、木造建築なので廊下等を歩けばギシギシと鳴ってにぎやかに感じたものでした。

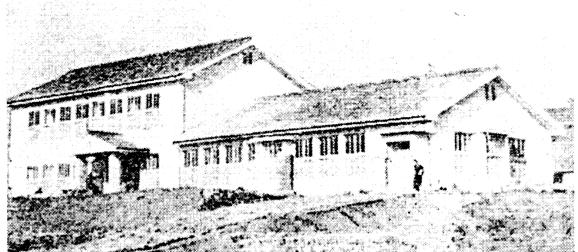
当時、役場庁舎の講堂を利用して三日間の家宝展を催したところ、山浦兄弟、雷電の遺品、晩霞の作品等の秀作をはじめ、数多くのお宝をご出品願い、盛大な催しができましたことに深く感謝したいと思います。期間中二晩は会場において4、5名で不寝番をして安全を期しました。また、この催しに対し長野放送局より一部の代表作品の放映を依頼され、テレビ出演もいたしました。私たちの町は町

中に美術品、宝物がある歴史の町でもありますので、永遠に守り続けたいものです。

寺島会長さんの後を継いで15年、「心と心のふれあい」をモットーに会員皆様の御支援と丸山さん、小林さんの両副会長さんをはじめ、多くの役職諸氏のご協力に支えられ、大過なく無事大任を果たすことができました。心から感謝申し上げるとともに、今は解放という屈託のない毎日でございます。本当にありがとうございました。

終りになりましたが、文化協会のますますのご発展をご祈念申し上げ、ごあいさついたします。

(平成元年「せせらぎ第6号」より)



▲旧町役場、一時町民センターとして利用された

一人一学習で老後も 楽しめる活動を



文化協会長 丸山 光夫

平成元年度の総会において前小林会長の後任として会長に推薦されました。もとよりその器ではありませんが、東部町の文化活動に取り組み、育てて参りました先輩各位の尊い足跡をたどりながら、みんなで知恵を出し合って今よりも一歩でも前進できるよう皆様のご協力を心よりお願い申し上げて、この重責をお引き受けすることにしました。

今まで副会長として補佐して参りました経験を生かして、町民の皆様にご理解を深めていただき、会員相互の親睦を図るために、「文化協会報“せせらぎ”」の発行、文化講演会の共催(富永一郎先生、小林亜星先生)、公民館による教養講座への全面的な協力を推進して参りましたが、各部会の発表会、展示会、部会活動運営等については未だに不充分な面もあり、今後の課題として改善して参りたいと思います。

会員140グループ、1820名の大世帯となり本年は会員名簿も作成します。

高齢化社会を迎え、人生80年時代に対応するため、一人一学習を身につけて町の福祉行政と共に、活力ある生甲斐を求めて長寿社会の老後を迎えることを思っています。

私は文化協会と体育協会は車の両輪だと思います。若いうちは体力を鍛え、併せて文化協会で心のふれあいを求めて会員相互の研修と、生涯学習の場として町民の皆様に親しまれる活動を文化協会の使命と考えております。

平成3年3月には町民長年の悲願であった文化会館が開館できる予定ですが、この完成を文化協会としては全町民に喜ばれ親しまれる芸術文化の殿堂として、広く地域社会の中核として貢献されることを心から期待しております。

町民の皆様のご健勝を祈念すると共に、一人一学習一趣味を身につけて、老後を楽しく学習できる文化協会へのご理解とご協力をお願い申し上げご挨拶といたします。

(平成元年「せせらぎ第6号」より)

特集 文化の里を考える 座談会

文化協会はどうあるべきか(一部分)

せせらぎ編集委員

司会 現在の公民館と文化協会の活動の分野はどうなっていますか。

A 先ほど出た音楽祭は、今は、主催は公民館、後援は文化協会というかたちで、各地区をまわって盛大に開催されています。これが、公民館が育ってくれた一番の原動力になっていると思います。

教養講座は、公民館が募集して、公民館の委託で文化協会がやっています。

教養講座の卒業生は、現在140グループ、1800名ほどになっており、このまとめは文化協会が当たっています。町からの補助金は18万円で、会費は一人300円です。各グループへの助成金は出しています。部会はいろいろあって、活発なところとか、もうちょっとの感じとか、内容を検討させてもらっています。

司会 文化協会はどういうことをやるべきでしょうか。

E 地域の文化活動の土壌と、同時に活動の芽の育成が一番大事です。今、“文化の時代”と言われるが、その裏はどうでしょうか。素晴らしいグループが百いくつもあるというが、その一人一人がいかに自分のやった事を地域において還元(おこぼれ)しているか、という事が一番の問題になってきます。これは、前会長、現会長さんも常におしゃっています。

地域還元、つまり地域文化は大きく言えば東部町づくりにも関連してゆくのではないでしょうか。社会教育と連携して実践活

動をする時、文化協会が主体的にどう援助するかを考えてゆきたいものです。

F Eさんのおっしゃられたこと、確かにと思います。今140ものグループがあるそうですが、グループにはいろいろあって、個人の勉強では地域への還元の仕方が分からぬいものもあります。

それを前提において、地域に還元できるグループをもう少し作って欲しいと思います。例えば、町の歴史を学ぶとか、行政とつながりがあって、直接町づくりにかかわるようなグループで、しかも各地域で小さくても気軽に入れるようなものを希望いたします。

G 文化協会の規約では、グループだけでなく、個人でも入れるようになってはいますが、個人加入は無いですね。昨年、和地区で総合文化展を開いたら、文化協会に関係ない人も出品して良い事でした。その個人を町の広場へ引き上げて頂くことが大事だと思います。

Fさんの言われた事については、図書館に古典や古文書など4講座があり、文化協会の中にも古文書があって、いい勉強を重ねているようですが、双方で拡充の方向がとれればいいと思います。

(平成元年「せせらぎ第6号」より)



▲熱心に話し合われる座談会

文化活動と学習ボランティア

社会教育委員 小山 定雄

中央教育審議会は「地域社会と文化について」答申し、「心の豊かさ」を求める国民のニーズの高まりに対して、文化行政を国民の生活

レベルで拡充することを提言しています。

それ以来「文化の時代」という言葉は広く口にされる様になってきたとともに「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」という考えが広まって参りました。

総理府の「国民生活に関する世論調査」によ

ると「心の豊かさと物の豊かさのどちらを重視するか」の質問に対して「心の豊かさ」を重視する割合が非常に大きなウエイトを占め、同じく「文化に関する世論調査」や「生涯学習に関する調査」によると、文化活動や学習活動へのニーズと参加希望は非常に大きな数を示しています。

わが東部町文化協会の会員として文化活動や学習活動に参加されている方は二千人になんなんとしております。そして東部町の第三次計画では「魅力ある生活文化を共に創る」を掲げ、「地域に根ざした自主的活動の助長を図ることに力を入れております。

さて今、「文化の時代」に応じて求められているのは、芸術文化の振興や文化財の保存は勿論であるが、私たちの毎日の生活の中で人々の心を豊かにし、毎日の暮らしに「はりあい」「生きがい」を持ち、人間らしさの取りもどしや完成が出来るところの暮らし方のスタイルを、新しく創ってゆく事が「文化の時代」という言葉の中にあるのではないでしょうか。

表面的な又は効率的な人との結びつきや関係ではなくて、人々の心を暖め、心の交流する「ふれあい」との関係の文化ではないでしょうか。それは文化活動や学習活動を通して「出会う」人々との関係であります。

個人個々の活動でも、好きな仲間（グループ・サークル）の活動で、心の中に生み出された「感動」や「よろこび」は、一人一人のものであります。それより一層深く大きな「感動」や「よろこび」をうるために自分だけでしまっておくのではなく、それを他者（友だち・近隣の人・地区の人達）と共有するところに、その「よろこび」は一層倍加するものだと思います。

即ち自分が文化活動や学習活動を通して体得（体験）したものをおすそわけ（外部に表現する。地域還元）をしてやることです。この事によって人からよろこばれ、感謝され、又自分の今後の新しく創り出してゆく考え方や、作品の創作に一層の示唆に富んだ助言も得られます。その上に人ととの間に「暖かさ」が広がってゆきます。

この様に新しいものを創り出したのを外部

に表現しなければ文化は具象化されません。人々にその価値を認められ、「よろこび」を共有することが又、次への創造の源となり、更にその「文化」を保持してゆくためには他の人との連携や協力なしには成立しないと思います。文化・学習活動をなされてる皆さま、自分一人だけでなく、又グループだけでのではなく、その「感動」「よろこび」の持てる力を「地域還元活動」にご奉仕をしていただきたいものです。生涯学習でいうところの「学習ボランティア」であります。

それは町民の人間性や知識・技能などの向上を目指す生涯にわたる文化活動・学習活動の指導や助言・援助することであります。細かく言えば知識を増すことや、考えることや、創造することなどの活動体験をすることによって思考力・判断力・記憶力を高め、人の心や美についての感受性を磨くこと、心身の健康や増進、課題達成の意志を高めることなどであります。したがって「学習ボランティア」はボランティア精神を持って生涯にわたる学習を援助する人であります。

そしてこれから出来る分野・内容として、

[一] 自宅や近隣で出来ること。

- ①得意なものを教え合う活動、
- ②地域の子どもに対する世話や指導、

[二] 地域の中で出来ること。

- ①青少年団体に得意な事を教える活動、
- ②高齢者の生きがい援助、
- ③地域や各種団体の世話役・委員になる、
- ④地域に各種グループをつくる活動、
- ⑤学習に関する情報を提供する活動、

[三] 各施設で出来ること。

などであります。

この様に私達は、老若男女すべての人々が、今迄の、又今実践している文化経験の有無に関係なくあらゆる教育の資源を利用し、自分の生き方を見直しながら生涯にわたって人間完成への努力を支援する生涯学習と一体化してこそ「ふれあい」がわが東部町の文化を一層発展させるものではないでしょうか。

（平成2年「せせらぎ第7号」より）

東部町文化会館落成

東部町長 保科 俊教



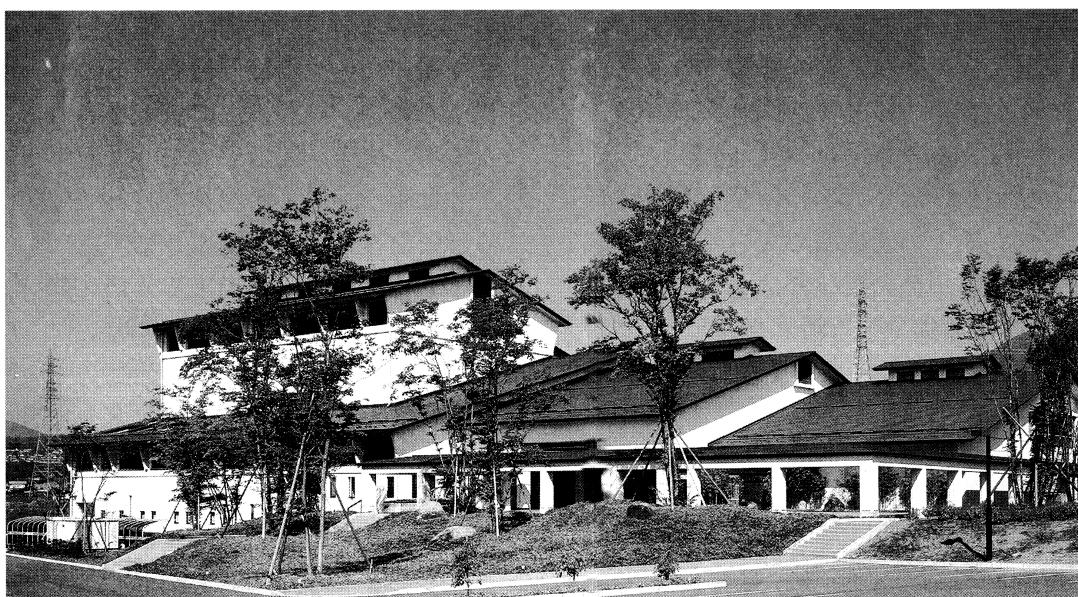
私たちを取り巻く社会経済情勢の変化は誠に目まぐるしく、人々の生活意識が多様化する中で、心と生活に潤いを与え、豊かな人間性を培う芸術文化への指向は、広く深いものがあります。

こうした中で、東部町文化会館が誕生しましたことは、人づくり、町づくり、地域づくりを礎とし、豊かな文化都市を目指す本町にとって、その価値は計り知れないものがあります。

建物の外観は、国的重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「海野宿」をイメージに、やわらかさと親しみやすさが感じられるデザインとなっており、クラシックを基調とした多目的ホールの音響効果は、県内外に誇れるものと自負しております。

また、併設の展示室、リハーサル室、練習室等は、各種文化団体等の活動を支援する総合施設として、ご利用いただく皆さんには十分満足いただけるものと思います。

この施設が地域の人々に広く親しまれ、名実ともに文化の殿堂として活用され、情操豊かな地域文化が一層発展していくことを願ってやみません。(開館記念パンフレットより)



施設の概要 : Outline of Institute

所 在 地 長野県小県郡東部町大字常田505-1
電話 (0268) 62-3700

敷 地 面 積 20,287.36 m²

建 築 面 積 4,071.84 m²

建物延面積 4,897.69 m²

構 造 鉄筋コンクリート造
一部鉄骨鉄筋コンクリート造・2階建

工 期 着工／平成元年7月11日

竣工／平成2年10月20日

開館／平成3年3月3日

総 工 費 28億2千万円

■ホール

用 途 音楽、演劇、式典、大会 等

収 容 人 員 762席(固定席709席、可動席48席、

車椅子席5席)母子席5席

残 飽 時 間 1.6秒(音響反射板設置時)

舞 台 間口18m、高さ9~10m、奥行き14m

舞 台 設 備 音響反射板、バトン10本、

照 明 設 備 照明操作卓(パラステージAタイプ)

音 韶 設 備 音響調整卓(RAMSA・S840)

映 写 設 備 16・36mm兼用機2台

樂 器 ピアノ

(スタインウェイD-274・ヤマハCFⅢ・C7B)

■付属施設

樂 屋 4室(大・中・小2)

リハーサル 141 m²

練 習 室 102 m²

展 示 室 220 m²(可動パネル)

会 議 室 3室(48 m²・65 m²×2)

駐 車 場 250台



わたしの愛する東部町

北御牧村 依田 千祥

東部町の皆様には毎日、大変お世話になって居ります。

東部町の文化の中心地、中央公民館には、今日も車をとめる所に苦労するほど、皆様が集まりそれぞれの勉強に励まれ、中に入ると活気に満ちた明るい笑顔、笑顔。東部町の文化協会は、私がお世話になりました13年前には、すでに確立されていて、今日充実の一途をたどっています。現在国をあげて、生涯教育の重要性がさけられておりますが、東部町

は他町村にさきがけて、その先進地といって過言ではありません。そんな陰に、文化協会長さんは自分から多数のクラブに入会され、直接生徒さん達の心を肌で感じて文化協会を運営されています。そして町当局のすぐれた先見性とその努力に対し敬意を表します。

そんな東部町に今年3月には文化の殿堂、すばらしい文化会館が出来上りました。私の会も来年8月、そこを使わせていただくのを楽しみにしております。

東部町は今、めざましい経済の発展へ変貌をとげています。その活力で文化協会も、増え御発展されます様、お祈り致します。

(平成3年「せせらぎ第8号」より)

「墨蹟展の企画」を顧みて

長岡 悄司

平成4年は、東部町文化会館（サンテラスホール）の開館一周年にあたっていました。その記念に著名な文人、墨客の手になる書の作品を借り集めて展覧会をしてみたら面白かろうとの話が、書道仲間の集まりで出たところ、大勢の賛同がありました。

そこで文化協会長の丸山光夫氏と書道部会長の私との連名で、東部町長宛に開催と援助に関する請願書を提出したところ、すべて前向きの回答が得られ、ほっとしました。次に書道部会の役員会を開き展示作品の作者名のリストアップ、経費の捻出、目録の作成、作品の運搬、期間中の会場警備等の他、万が一の盗難に備え損害保険をかけておく事などにつき、具体的な開催計画を検討し、業務分担を決めました。

作品の借用は町内に限らず、上田、佐久、長野、松本等広い範囲に及びました。そして展示できた作品総数は文人・墨客で43点、象山、海舟、晚霞、藤村等歴史上にその名を残した人物の肉筆ばかりです。なお作品の借用については作品のもつ芸術性や作者の人格に

ふれ、参觀者の感動を深め豊かな心情を蘇らせたい趣旨であることを、所蔵者に申し上げました。

展示作品目録の表紙は、赤岩にある刀匠山浦兄弟生誕碑の名文「老のねざめ」の拓本で飾りましたが、その採拓は寒中のことで係の女性達が大変に苦心されました。表紙の題字は長久寺の佐藤隆伝師の妙筆です。

展覧会場へは沢山の方が遠方からもお運びになり、熱心に觀賞下さいました。特に初日には長野県書道展審査員、元香墨会長岡川桂城先生をお招きし「書の觀賞のし方」と題する講演会を開いたところ70余名の参加者がありました。

懐かしく忘れることができない企画展でした。





20周年を祝して

東部町議会議長 吉池 象次

文化協会が発足して、20周年を迎えるお祝いを申し上げます。

戦後の混乱も漸くおさまり、各地に「心の豊かさ」を求めて、文化活動が行われる様になりました。当町では、こうした動きに対応して、相互の連絡と研鑽を目的に、文化協会が設立され、今日まで芸術芸能の広い分野にわたって、活動してきました。現在会員は1,800名余と聞いて居りますが、このすばらしい協会を育てていただいた歴代の役員の皆様に、深く敬意を表すると共に、感謝を申し上げます。

今、町では「町づくりは人づくりから」を基本にして、生涯学習の推進を図っています。次代を担う子ども達を育てるためにも、大人の私達が、大いに勉強しなければならないと思います。又、高齢化時代を迎えて、身近に、楽

しみながら学習して、生き甲斐のある生活を送ることも、極めて大切なことだと思います。その意味からも、文化協会の皆さんと、リーダーとなって、この学習の輪が、全町民に広がってゆくことを、期待するものであります。

高速道時代を目前に控え、町も大きく変わろうとして居りますが、私達は各地を視察して見て、教育、文化の基盤が、しっかりと居らなければ、優良企業の立地も無く、又産業の発展も期待できないということを感じました。官民一体となって、更に文化の振興を図らなければならないと考えて居ります。

東部町は、山浦刀匠や丸山晩霞を生み、又歌舞伎の伝承等に見られる様に、古くから、文化の進んだところです。この伝統を大切にして、その上に新しい文化を築き上げ、美しい花を咲かせたいと願うものであります。

20周年を契機として、文化協会が益々発展されることを祈念し、併せて会員皆様の御健勝をお祈り申し上げ、私のお祝いのことばと致します。（平成4年「せせらぎ第9号」より）

車の両輪

東部町公民館長 関 亀一

最近しばしば、近隣市町村の方々から「東部町は文化活動が盛んですね」「東部町は燃えていますね」などの羨望を交えた感嘆の声を聞く。

ここにいう「文化活動」は、趣味や芸術教養に関する活動を指しているのだが、その実情はどうだろうか。少し数字をあげてみよう。

- ・中央公民館年間利用者 約60,000名
(生涯学習塾・町民大学、各種学級学習活動)
- ・分館単位の学習グループ クラブ数 267
　　クラブ員 約3,500名以上
- ・図書館 年間来館者 約37,000名
　　貸出図書数 約50,000冊余
- ・文化会館入場者 約30,000名

（以上平成4年記録）

これらの数字をどう見るか。他町村に比べたとき、まさに燃えている東部町の姿を如実に語るものといえよう。

町では、重要施策の一つとして、生涯学習の

町づくりを進めているが、これらの文化的な学習活動は、町づくりの基本である町民一人ひとりの豊かな個性を培う上で、極めて大切である。

公民館では、生涯各期の学習をはじめ、女性問題・人権問題等今日的課題についても、できるだけ多くの学習機会を提供すべく努力をしているが、文化的な学習活動の振興については、文化協会の力に負うところが極めて大きい。

趣味・教養の基礎を培う「生き生き生涯学習塾」は、本年度35教室が開講し、約500名の皆さんのが学習に励んでいるが、これは、共催の文化協会の全面的な協力によるものであり、また、学習成果発表の最大イベントである「総合文化フェスティバル」の中核になる実行委員会の主体も、文化協会である。

まさに文化協会と公民館は、文化的学習推進の車の両輪であり、共にその中核的機関である。発足20周年を祝うとともに、町民の生涯学習充実のため、文化協会のいよいよご発展を祈り、その活動の拡充に大きな期待を寄せている。

（平成4年「せせらぎ第9号」より）

おもいで

荻原とめよ

あれから早や20年、夢の様です。当時文化協会が発足すること、私も張り切って参加しました。

先ず役員選出、事業計画などを決めスタートする事になりました。ところが予算がありません。役員の方が町長さんにお願いしましたが、当時年額僅か金10万円の補助だけでした。これではだめだ、解散だア等と言う声もありました。しかし、せっかく出来かかった会を…と又奮いたち、今年は各会員から会費を頂く事となり、細々ながら始めたのでした。会は継続と決定したので、皆さんの喜び様は大変なものでした。時間的にも経済的にもゆとりの出来た皆さんには、何かを求めていたに違いありません。次々と入会希望者が多く、役員の皆さんも、ほっとした感じでした。最

初はお茶・生花・人形・書道・絵画・俳句・合唱クラブ等。指導者は役員の中に適任者が大勢おいででしたからとても助かりました。次々と各部門も増え、従って人数もふくらみ、合同の作品展の日は、お祭りの様な賑やかさでした。

さて20周年を迎えた今日、最初は模倣もあるでしょうが、今後は創作にむかい、自分独特の作品を作ることにより、意欲も湧き生き甲斐のある人生を送ることが出来ることと思います。

益々の御発展を祈ってやみません。

(平成4年「せせらぎ第9号」より)



▲草月流東部展の前で

むかしと今

東部町公民館長 石川 好一

むかしが、すべていいわけではない。
しかし、
むかし、人々は知恵を働かせた。
だから、いつも、自然を素直に見つめ
自分を、いつも、厳しく見つめていた。
今、人々は、「他」に頼っている。
だから、いつも、心も顔も外を見つめている。

むかしの母は、赤ん坊に自分の乳房を吸わせた。
今、母は、雑誌を見ながら哺乳びんを吸わせ
ている。
むかしの母は、赤ちゃんの瞳を見つめて、語
りかけていた。
今、母は、T・Vを見ながら、上の空で赤ん
坊のおしめを取り替えている。
むかしの母は、赤ん坊の体温を自分のおでこ
で確かめた。
今、母は、それを電子体温計でみている。

むかしの母は、わが子のいたずらを
近所に、あやまり回った。

今、母は、わが子のいたずらを隣りの子のせいにしたがっている。

むかしの母は、わが子の非を、仏前に座って謝した。

今、母は、わが子の非を、社会のせいにしたがっている。

むかしが、すべていいわけではない。

むかしは、いろいろなものが不足していた。

“食うこと”、“生きること”に精一杯だった。
しかし、そんな中にも、何かほんのりするものがあった。心のぬくもりがあった。

今、何でもある。冷蔵庫の中で“もの”を腐らせているほどだ。

しかし、そんな豊かな生活の中にいる自分に、何かが欠けているように思えてならない。

むかしが、すべていいわけではないが…。

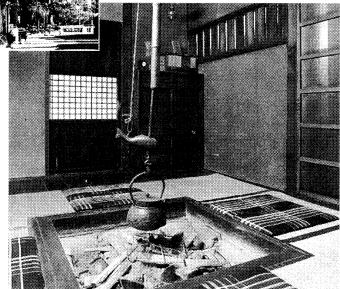
「お母さん一、秋の空って、筆でこすったよう、雲が広がっているね」
「そんなこと、どうでもいいでしょう！早く、宿題をやりなさいよ！」
今は、何もかも揃ってはいるが、やっぱり、何かが欠けている。

平成6年度文化協会報「せせらぎ」の瀬音が町民のみなさんの心に、より清く、より美しく、響き広がることをご祈念するとともに、ご活躍されておられる協会のみなさんに心からの敬意を表して止まない次第です。

(平成6年 「せせらぎ第11号」より)



海野宿



資料館内囲炉裏の間

歌が好き、仲間が好き

—歌を通して仲間づくり—

せせらぎ編集委員

町発足四十周年記念イベントの一つ、「とうぶ第九を歌う会」の練習が毎回熱心に行なわれています。町内外から大勢の方々が、月三回の練習にかけつけます。當時三百名以上のパワーと熱気を一手に引き受け、全身で会を引っ張っている土屋実行委員長に、お話をうかがいました。

一月の発足以来、折り返し点を通過した練習の進行状況は、多少遅れ気味にもかかわらず、繰り返していねいな指導で、技術的には、確実に仕上がっているとのことで、八月中旬には、譜読みが完成するそうです。会員の反応は、とても意欲的かつ積極的で、その原因として、東京から先生が月一回指導に来て下さるのが、励みになっている。また、一流のソリスト、オーケストラとの共演、記念イベントに参加できる等、多くのニーズに対応できる企画であることが、考えられるそうです。

この会の最終目標は、第九の大合唱ですが、ただ歌うだけではなく、一年間の練習を通じ、人づくり、仲間づくりというメインテーマも、追求しています。仲間との交流の中から、新

しい発見、成長があるのではないか。経験者も常に新しい気持ちで、取り組んでほしいと、イベントの意義を熱く語る土屋委員長。そんな思いから、東京の先生を交えての大懇親会の計画もあり、手作りの会報が会員を結ぶなど、歌う仲間の輪は、着々と波紋を広げているようです。

最後に文化協会としてバックアップできることはとの質問に「とにかく聞きに来て下さい」との力強い速答が、返ってきました。歌への情熱が、ビンビン伝わって来て、思わず「立ち見が出るぐらい、来てもらいましょう」と、応じてしまいました。

12月1日には、皆さんぜひ第九の大合唱を聞きに、サンテラスホールへ行きましょう。

(平成8年 「せせらぎ第14号」より)



人形

高橋 節

文化協会30周年記念、本当に嬉しくお祝申し上げます。また中央公民館にて人形教室を始めましてより20年、長い間お世話になりました。

再び来ない尊い時間を、此の世に生まれ合わせた人々と、あどけない童子、初々しい乙女、あでやかな晴れ着姿の娘、ゆかしい奥様、気高い昔の人など、いろいろの人形を、共に慰め合い、励まし合い、助け合い、笑顔にて老化を防ぎながら、人形を創ってまいりますと、時の経つのも忘れ、温もりの世界に浸り、教室はおだやかな雰囲気に包まれて、楽しく過ごす事ができました。

心に写った感動の姿をそのまま表現される人形は、人形の型で表わさなければならない、なんでもない不思議さが心を躍らせて、人形と離れられない豊かな感動を覚えさせられます。

人形を習いましたお陰で多くの方々とお会

いできまして、人生の宝と思われ感謝いたしております。

日本人形は主に老人大学の方々でしたが、中には創作人形を創られた方もおられました。創作人形の材料は紙ネンドなど、何を用いてもよろしい事になっております。自分の心に描いたまゝを自由に、具象とも、抽象とも、表現すれば宜しいと思われます。

人形には作者の気持ちが現われてまいりますので、清い気持ちで創らなければと思いま

すが、修養ができませずお恥ずかしく思っております。

年のせいか体が悪くなり、続けたいのですが、教室を休む事になり残念でございます。

今後益々東部町文化協会の発展の多かれを願い、心よりお祈り申し上げております。



30周年を迎えた菊花会

東部町菊花会長 松澤 房視

お陰様で私ども東部町菊花会は、今年で創立30周年を迎えることができました。これもひとえに諸先輩方のご尽力と、町民の皆様方のご支援の賜と心より感謝申し上げます。

菊は奈良時代に中国より渡來したと言われていますが、今ではすっかり我が国の生活や文化に根付いています。秋ともなれば町中に菊の香が漂い、家々の庭先や軒下でも色とりどりの花を愛することができます。

鑑賞菊の栽培は苦労も多いけれども、それだけ喜びも大きいものです。手塩に掛けて育てた菊が見事に咲いた時に喜び、そして人々に観て頂き楽しんで頂くことの喜びは、菊づくり冥利に尽きます。そんな思いをこめて30周年記念の菊花展を開催致しましたが、多数の皆様方がご来場くださいましたことは何より嬉しく、この上ない励みともなりました。

どうかこれからも宜しくお願ひ致します。

(平成12年「せせらぎ第19号」より)



30周年の特別菊花展

☆特別菊花展で受賞された皆さん

上田商工信用組合杯	東部町商工會議長杯	菊会長杯	町議會議長杯	教育委員長杯	文化協會長杯	八十二銀行田中支店長杯	農協組合長杯	公民館長杯	町長杯	町長杯	町長杯
-----------	-----------	------	--------	--------	--------	-------------	--------	-------	-----	-----	-----

土屋 渡辺 披村 小林 桃津小学校 川上 出浦 松澤 後藤 依田 寺田 半田
節男 忠重 隆夫 孝敏 義雄 洋三 房視 房子 敦泰 明栄

三十周年を祝して

石井 補人

文化協会発足30周年を迎え、おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。協会発足の48年は、いわゆる石油ショックの頃がありました。

この激動のときに、ともすれば人の心がすさびがちで、誰もが平和で美しい愛情の通じ合う世の中を願ったのでありました。

この時に、文化協会が誕生したのでありました。これにより町民の連帯感が深まったのは計り知れません。この発足の意味は、偉大であり、今更ながら先見の明に敬意を表す次第であります。そして20周年を迎えた頃には、

人々の間に自主的に学ぶ姿が目立ち、物の豊かさに飽き、こころの貧しさに気づき始めました。そして30周年の今日までに、心の豊かさを実感し、集い来る人数知れず、生涯学習の町に相応しい文化協会に成長しました。

文化会館完成により各種部会の発表会、展示会、展覧会など数多く催されるようになりました。又、奈良原の池が完成して、“周辺を文学碑公園に”との声もちらほら聞こえて来る中、句碑を建てる話が持ち上がり、こまくさ句会の40名によって建立されました。写真は除幕式当日のものです。次々にこのようなものが出来て素晴らしい文学碑公園が実現するよう願ってやみません。

終わりに、文化協会が三十年を節として、いよいよ発展することを祈念いたします。



東部町美術会発足50周年を迎えて

東部町美術会長 萩原 芳雄

東部町美術会が誕生して50年になります。平成2年の40周年には記念誌の発刊、記念展と発足以来初めての記念事業を大規模に実施したところであります。時の経つのは早いものでそれから10年が過ぎ、20世紀最後の2000年という節目の年に記念すべき50周年を迎える、その記念事業を実施することになりました。戦後の混乱期から復興期、高度成長期そしてバブル崩壊と、まさに激動の半世紀ではなかったかと思います。このような時期を、美術会の運営存続をされてこられた諸先輩の皆さん方にただただ敬服し感謝するのみであります。本会の源流は丸山晩霞の出身地である旧祢津村に昭和24年祢津美術会が創設され、町村合併により東部町美術会に継承されました。当時会員数は15名位で洋画のほか農美的彫刻もありましたが次第に洋画、そのなかでも水彩画に傾いていったようであります。

物の豊かさから、心の豊かさが求められる時代と共に、町でも県下の町村に先がけて生涯学習に力を入れ、いきいき生涯学習塾の絵画教室開講と共に絵画人口も急激に増加し、現在会員数40名ほどで、まず描くことを目的に毎月2回の例会をもって絵の勉強をしております。そのほか、日本水彩展、水彩県展等の大きな展覧会出品用の作品研究会も実施しております。

これも諸先輩である特に会長を務められた先生方の、東部町を中心とした地域に絵画への理解や愛好の精神を培った業績は、極めて深く浸透していることを強く感ずるものであります。

我々の成すべきことと言えば、描くことであり、そしてお互い同じ目的を持って作品に取り組む場こそ意義深いものであると信じております。私達はこうした立派な先輩を乗り越えて益々技術鍛磨に精進し、絵画の発展のために、そして地域の芸術文化の向上に寄与することを願うものであります。

(平成12年 50周年記念画集の会長挨拶要約)

「せせらぎ」20号のあゆみ

編集委員長 清野 竜

「せせらぎ」は第1号から第5号までは「文化協会だより」という名前で、第1号は昭和59年に出ています。冒頭に小林進会長の「発刊に寄せて」というメッセージが載り、8部会の紹介が続いています。

第4号は昭和63年1月発刊、文化協会主催の漫画家の富永一朗さんの講演が紹介されています。また「新役員によりスタート」の記事があり、会長 小林進、副会長 丸山光夫・小林清枝、監事 土屋忠雄・寺島志づ、となっています。

第5号は63年12月発刊で、一面に小林亜星さんの講演会が行われたとの記事があります。第4号までは4ページ建てでしたが第5号からは大体8ページになっています。

第6号から「せせらぎ」と改められます。その第6号は、15周年特集号となっていますが、まず冒頭の「新会長に丸山光夫さん」という題字が目に飛び込みます。「グループ紹介」では、赤堀規子さんの「創作グループ『微風』」、小田中釉子さんの「かぼちゃの会」などのユニークな会が目を引きます。また丸山光夫、別府貞巳、小山定雄、小林進、山丸洋子などの諸氏による座談会の記事があり、この号は編集技術の向上もあり、内容豊かな、読みやすい紙面になっています。

第8号は平成3年発行、「なぜ、今生涯学習か」という、唐沢稔、長岡秀子、柳橋早智子、山浦いく子、小山定雄などの8氏による座談会の記事が注目されます。

第9号は平成4年発行、「20周年記念特集号」となっています。第11号は平成6年発行、「文化協会全サークルの紹介」が載っています。

す。子育てを終えた主婦の方や、定年を迎えた方が、さて何かやろうと考えたとき大変便利な一覧表だと思います。実は、21号でも企画していたのですが、予算がないということで中止になりました。

第12号は平成7年発行、新役員の紹介があります。会長 関義豊、副会長 佐藤利秋・小林俊子、監事 柳沢芳夫・佐藤充子となっています。また、「玉村豊夫さんからのメッセージ」という記事もあります。

第13号は平成8年3月発刊で、この年度は2回の発行です。編集技術もよく内容も充実しています。そして平成13年の12月に第20号が出ました。

平成14年度の「せせらぎ21号」は、文化協会創立30周年記念行事の報告と、各グループの紹介に力を注いでいきたいと思っています。

一般的な編集方法としては、原則として記事は編集委員が取材して編集委員が書く。写真は人物なら見て誰か分かるように、物の場合はアップにしたりして特色が分かるようにする。見出しとレイアウトを工夫するなどを考えています。





峠の石仏 第五十番